

公益財団法人 日本ソフトボール協会機関誌

ソフトボール

2024年/令和6年
第475号

8月号
(毎月1回10日発行)

編集兼発行者 公益財団法人 日本ソフトボール協会

〒160-0013 東京都新宿区霞ヶ丘町4番2号 Japan Sport Olympic Square

T E L . 03-5843-0480 F A X . 03-5843-0485

編集部 ㈱日本体育社 〒113-0033 東京都文京区本郷2-40-13-501

T E L . 03-3811-6911 F A X . 03-3811-6290



LA28 金メダルへの第一歩 新たな金メダルロードがここから始まる

「第17回女子ワールドカップ ファイナルステージ」(2024.7.15~20/イタリア・カスティオンズ ディストラダ)

C o n t e n t s

- | | |
|--|--|
| <ul style="list-style-type: none"> ・女子TOP日本代表レポート2
「第17回女子ワールドカップ ファイナルステージ」
女子TOP日本代表、「世界の頂点」へ
「日米対抗ソフトボール2024」
女子TOP日本代表、アメリカに3連勝 ・女子U18日本代表レポート8
「第15回女子U18ワールドカップ グループステージ」
グループB 組み合わせ決定! | <ul style="list-style-type: none"> ・令和6年度 女子大学日本代表選手選考会10 ・第57回日本女子リーグ交流節12
「プラチナセクション」
VONDS市原、平林金属、厚木S Cが首位を並走
「サファイアセクション」
MORI ALL WAVE KANOYA 単独首位 ・事務局だより16 |
|--|--|

公益財団法人 日本ソフトボール協会オフィシャルホームページ

www.softball.or.jp

第17回女子ワールドカップ ファイナルステージ



女子TOP日本代表

3 大会ぶり
4 回目の **世界一**



2024.7.15~20 イタリア・カスティオンズディストラダ

去る7月15日(月・祝)〜20日(土)、イタリア・カステイオンス・ディ・ストラータで開催された「第17回女子ワールドカップファイナルステージ」で、女子TOP日本代表が見事3大会ぶり4回目となる優勝、「世界一」を勝ち獲った。2008年の北京オリンピック、「東京2020オリンピック」(コロナ禍で1年延期され、2021年開催)で2大会連続の金メダルを獲得している女子TOP日本代表だが、この「ワールドカップ」では、大会名が改称される前の「世界女子選手権大会」の時代に、2012年、2014年と「連覇」を達成した後、2016年、2018年とアメリカに優勝をさらわれていた。

2028年ロサンゼルスオリンピックでの「ソフトボール復活」が決定し、この「第17回女子ワールドカップファイナルステージ」は、その「LA28」での「3大会連続の金メダル獲得」へ新たな「金メダルロード」のスタート、第一歩と位置づけ、大会に臨んでいた女子TOP日本代表は「オーピングラウンド」グループBを3戦全勝の1位で通過。「スーパースタジアム」に駒を進め、「スーパースタジアム」では「宿敵」アメリカに敗れたものの、2勝1敗の2位で決勝に進出。決勝ではアメリカと再戦し、6-1で快勝！リベンジを果たし、3大会ぶり4回目の優勝に輝いた。

OPENING ROUND 第1戦 日本 3-0 オーストラリア



現地レポートはこちら



試合経過詳細はこちら

OPENING ROUND 第2戦 日本 8-0 プエルトリコ



現地レポートはこちら



試合経過詳細はこちら

OPENING ROUND 第3戦 日本 4-3 オランダ



現地レポートはこちら



試合経過詳細はこちら

SUPER ROUND 第1戦 日本 0-2 アメリカ



[現地レポートはこちら](#)



[試合経過詳細はこちら](#)

SUPER ROUND 第2戦 日本 7-2 カナダ



[現地レポートはこちら](#)



[試合経過詳細はこちら](#)

ビデオ判定を導入

野球ではすでに「当たり前」になりつつあるビデオ判定だが、競技施設の問題や使用するカメラの台数等、メジャーリーグや日本のプロ野球のように常設したスタジアムで開催されるのではなく、様々な球場・施設を利用して大会を開催するソフトボールにおいては、なかなか実現が難しく、予算的にも「プロの興行」として成功し、莫大な利益を生み出している野球と同様の措置を取ることは現実的ではないと考えられてきた。

ただ、WBSC（世界野球ソフトボール連盟）が、野球とのジョイント組織であり、すでに野球でビデオ判定のノウハウを有していることからソフトボールにおいてもWBSCの主権大会でのビデオ判定の導入に踏み切った。

日本のチームが、この「ビデオ判定」が導入された大会を戦うのは今大会が「初めて」のことだが、日本戦でいくつかビデオ判定によって明暗の分かれるシーンが見られた。

まず「オープニングラウンド」最終戦のオランダ戦の6回裏、先頭打者の2番・石川恭子がセーフティーバントを決め、出塁すると、3番・塚本瑠もバント。一塁アウトの判定だったが、ここで宇津木麗華ヘッドコーチが「チャレンジ」。ビデオ判定の結果、一塁セーフとなり、無死一・二塁とチャンスが広がり、ここから3点差を這いつき、最終回の劇的サヨナラへと結びつく大きなプレイとなった。

「スーパーラウンド」初戦のアメリカ戦、グループA・Bの1位同士の対戦「全勝対決」でもビデオ判定があり、2点をリードされた日本の6回裏の攻撃、二死から2番・石川恭子が二塁打を放って出塁し、続く3番・塚本瑠のレフト前ヒットで生還。1点差に詰め寄り、反撃ムードが高まったが、ここでアメリカが「チャレンジ」。ビデオ判定の結果、二塁走者・石川恭子の離塁が早く、離塁アウト。得点を取り消され、スリーアウトとなる等、ビデオ判定が試合の流れ、結果にまで影響を及ぼすケースも見られた。

これら一連の流れを受け、今後、国内の大会でも「J.D.リーグ」等での運用が検討されることになるだろうが、前述したような試合会場・施設的な問題、必要となるカメラの台数、そこに割くべきマンパワー、かかる人件費・設備投資等を考えると、簡単な問題ではない。今回のビデオ判定でもどこまでの映像がとらえられているのか、判定の正確性を担保し得るものとなっているのか等、検証は必要になるだろう。

時代の流れとして、向かうべき方向性は「ビデオ判定の導入」という方向に向かわざるを得ないだろうが、クリアすべき問題点が山積していること、それをいかに解消・克服していくかも同時に考えていく必要がある。

※ビデオ判定を要求する「チャレンジ」は7回までに1回要求することができ、「チャレンジ」に成功し、判定が覆れば、その権利は保持され、「チャレンジ」に失敗し、判定が覆らないと、「チャレンジ」の権利を失い、その試合でもう「チャレンジ」を行うことはできない。

また、延長戦に入った場合は、新たに1回の「チャレンジ」の権利が生じるが、7回までに「チャレンジ」の権利を行使しなかった場合でも、その権利が累積（追加）されることはない。

CHAMPIONSHIP FINAL 日本 6 - 1 アメリカ



[現地レポートはこちら](#)



[試合経過詳細はこちら](#)



第17回女子ワールドカップ ファイナルステージ

[出場選手・スタッフはこちら](#) [スケジュール・試合結果はこちら](#) [戦績表はこちら](#)

●日米対抗ソフトボール2024●

第1戦 愛知県名古屋市 バンテリンドームナゴヤ



第2戦 静岡県富士宮市 富士山スタジアム



第3戦 神奈川県横浜市 横浜スタジアム

第1戦 JAPAN 1 - 0 USA



第2戦 JAPAN 9 - 5 USA



第3戦 JAPAN 8 - 1 USA



第1戦・第2戦・第3戦のスコアをクリックすると各試合レポートの詳細がご覧になります



最終戦は「東京2020オリンピック」決勝の舞台となった神奈川県横浜市・横浜スタジアムで行われ、初回に工藤環奈の適時三塁打、下山絵理のツーランホームランで3点を先制し、試合の主導権を握り、結局、8-1の6回コールド勝ち。女子TOP日本代表が3連勝を飾った。

第2戦は静岡県富士宮市・富士山スタジアムに戦いの舞台を移し、一転して激しい打撃戦を展開。14安打の猛攻で9点を奪い、9-5と打ち勝ち、連勝を飾った。

「日米対抗ソフトボール2024」は7月4日(木)、愛知県名古屋市のバンテリンドームナゴヤで第1戦を行い、6回までノーヒットに抑えられながら、最終回、中川彩音がチーム初安打。下山絵理も二遊間を抜く安打で続き、ワールドピッチで一死二・三塁の一打サヨナラのチャンスをつかむと、工藤環奈のセカンドへの高いバウンドの当たりがサヨナラ安打となり、1-0の完封で初戦を勝利で飾った。

第15回女子U18ワールドカップ グループステージ グループB 試合スケジュール決定！

FOR THE TITLE OF WORLD CHAMPION



GROUP B

- CHINA
- ITALY
- JAPAN
- NETHERLANDS
- PERU
- PUERTO RICO

OPENING ROUND

AUG 14 - DAY 1 PINGTAN STADIUM

1 13:00	PERU	VS	JAPAN	2 16:00	NETHERLANDS	VS	PUERTO RICO
3 19:00	CHINA	VS	ITALY				

AUG 15 - DAY 2 PINGTAN STADIUM

4 10:00	PUERTO RICO	VS	JAPAN	5 13:00	ITALY	VS	JAPAN
6 16:00	CHINA	VS	PERU	7 19:00	CHINA	VS	NETHERLANDS

AUG 16 - DAY 3 PINGTAN STADIUM

8 10:00	PERU	VS	ITALY	9 13:00	NETHERLANDS	VS	PERU
10 16:00	JAPAN	VS	NETHERLANDS	11 19:00	PUERTO RICO	VS	CHINA

AUG 17 - DAY 4 PINGTAN STADIUM

12 10:00	NETHERLANDS	VS	ITALY	13 13:00	ITALY	VS	PUERTO RICO
14 16:00	PERU	VS	PUERTO RICO	15 19:00	JAPAN	VS	CHINA

PLAY-OFFS

AUG 18 - DAY 5 PINGTAN STADIUM

17 TBD	B4	VS	B3	16 TBD	B6	VS	B5
18 TBD	B2	VS	B1	FINAL			
19 TBD	Gm 17 Winner	VS	Gm 18 Loser	REPECHAGE			

受け継がれし「世界一」への挑戦の記憶



「女子U18」のカテゴリは、「TO Pカテゴリ」同様、まず各大陸の予選（ヨーロッパ、アフリカ、北中南米、アジア、オセアニアの5大陸の予選）を戦い、それを勝ち抜いたチームが「ワールドカップグループステージ」に進出。A・B・Cの3グループに分かれて「ワールドカップファイナルステージ」進出をかけて戦い、各グループの上位2チームが「ワールドカップファイナルステージ」に駒を進め、ここに「ワールドカード」2チームを加えた8チームで「世界一」の座を争うことになる。

各大陸の予選は、昨年より今年にかけて行われ、日本の場合、「アジア予選」にあたる「第9回女子U18アジアカップ」（昨年8月29日～9月3日、中国・平潭で開催）を「全勝」の1位で通過。「ワールドカップグループステージ」に駒を進め、ここで2位以内に入れば、来年、アメリカ・ダラスで開催が予定されている「第15回女子U18ワールドカップファイナルステージ」への出場権を手にするようになる。

従前までの大会開催方式と異なり、「アジアカップ」↓「グループステージ」↓「ファイナルステージ」と実に「3年」の月日をかけて戦うことになる。当然のことながら「女子U18」のカテゴリは、大会参加の「条件」に「年齢制限」（18歳以下）が設けられている。

(公財)日本ソフトボール協会では、「強化の継続性」を重視しながらも、この年代の選手たちの成長度合い、変化の大きさを鑑み、「アジアカップ」「グループステージ」「ファイナルステージ」それぞれの大会ごとに選手選考会を実施し、常にその時点での「ベストチーム」を編成し、大会に臨む方針を打ち出しており、去る4月23日(火)〜25日(木)、静岡県伊豆市・天城ドームを主会場に、「令和6年度女子U18日本代表チーム選手選考会」(※第15回女子U18ワールドカップグループステージ(中国・平潭)出場選手選考会)を開催。各都道府県支部協会の推薦を受けた97名もの参加者の中から「日本代表」として大会に出場する代表選手「16名」が選出された(グループステージ進出までの軌跡、選手選考会の詳細は機関誌「J S A ソフトボール」第473号／2024年6月号・P2〜5参照)。

このほど、WBSC(世界野球ソフトボール連盟)より、「ワールドカップグループステージ」の試合スケジュールが正式に発表された。

日本が出場する「ワールドカップグループステージ」グループBは、8月14日(水)〜18日(日)、中国・平潭で開催され、ホスト国の中国(世界ランキング11位)、イタリア(同7位)、日本(同2位)、ペルー(同15位)、プエルトリコ

(同3位)の6チームでまずシングルラウンドロビン方式(1回総当たり)の「予選リーグ」にあたる「オープンングラウンド」を戦い、その順位に基づき、最終順位を決定する「順位決定プレーオフ」を実施。3位・4位、1位・2位のチームがそれぞれ戦い、1位・2位戦の勝者は「第1代表」として、「第15回女子U18ワールドカップファイナルステージ進出」が決定。1位・2位戦の敗者は3位・4位戦の勝者と対戦し、勝者が「第2代表」としてファイナルステージへの切符を手にするようになる。

3位であれば「ワールドカード」でのファイナルステージ進出の可能性が残るが、4位以下はファイナルステージへの道は閉ざされ、グループステージでの敗退が決定する。

女子U18日本代表は、8月14日(水)の開幕戦でペルーと対戦。翌15日(木)にはプエルトリコ、イタリアとのダブルヘッダーが組まれ、16日(金)にオランダ、17日(土)の最終戦でホスト国・中国と対戦する。

まずこの「オープンングラウンド」で4位以上に入らないと、その時点で「ファイナルステージ」進出の道が閉ざされてしまう。

できれば1位ないし2位で「順位決定プレーオフ」に駒を進め、その試合に勝利し、「一発」でファイナルステ

ージ進出を決めたいところだ。

このカテゴリーでは、1981年の第1回大会での男女アベック優勝を皮切りに、1991年の第4回大会で2回目の優勝。1999年の第6回大会、2003年の第7回大会では「連覇」を達成。2013年の第10回大会で5回目の優勝を飾っているが、それを最後に「世界一」の座から遠ざかっている。

一方、日本の「最強にして最大のライバル」アメリカは1987年の第3回大会、1995年の第5回大会で優勝を飾り、2007年の第8回大会、2011年の第9回大会では「連覇」を達成。2015年の「第11回大会」以降は、2017年、2019年、2022年と大会4連覇。今大会も「グループC」を勝ち抜き、「デیفエンディングチャンピオン」として大会に臨んでくることだろう。

このジュニアカテゴリーでは、必ずしも「勝つこと」、この時点・段階で「世界一」になることが「目的」「目標」ではないが、現在の女子TOP日本代表に目を向けてみても、「レジェンド」上野由岐子は1999年「第6回大会」を制した優勝メンバーであり、「東京2020オリンピック」金メダリストの後藤希友は2019年「第13回大会」準優勝、三輪さくらは2017年の「第12回大会」準優勝、坂本実桜は後藤希友とともに「第13回大会」に出場している。

キャッチャーは炭谷遙香が2019年の「第13回大会」のメンバーであり、切石結女は出場歴はないが、2017年の「第12回大会」がインターハイと大会日程が重なってしまったため「辞退」しただけで、そんな事情がなければ当然選ばれていたであろう「実力者」である。野手では「キャプテン」の石川恭子、坂本結愛が2015年「第11回大会」準優勝、下山絵理、須藤志歩、藤本麗が2017年「第12回大会」の準優勝メンバーと、実に16名中10名がジュニアカテゴリーで「世界の舞台」を経験しており、TOPカテゴリーともつながっているとについても過言ではなく、その意味ではこの大会が女子TOP日本代表への「登竜門」となっているといえるだろう。

2028年ロサンゼルスオリンピックを見据えれば、ここは「通過点」であり、どうしても「通っておかなければならぬ道」であると同時に、このカテゴリーにおいても、そろそろアメリカの「独走」にストップをかけることが、「オリンピック3大会連続の金メダル」獲得という「偉業達成」に近づく道になるはずである。

出場選手名簿・プロフィール
試合スケジュール等詳細情報は
J S A オフィシャルホームページで

**「第15回女子U18ワールドカップ」
グループステージ グループB**

Click

令和6年度 女子大学日本代表選手選考会 （※第4回女子大学アジアカップ代表選手選考会）



去る7月16日（火）～18日（木）の3日間、静岡県伊豆市・天城ドームを主会場に、「令和6年度女子大学日本代表チーム選手選考会」（※第4回女子大学アジアカップ代表選手選考会）が開催された。

選考会には、所属大学の学長、チーム監督、各都道府県支部協会の推薦を受けた53名が参加。「女子大学日本代表」として「第4回女子大学アジアカップ」に出場する代表選手「16名」の座をめざし、選考に臨んだ。

選考会初日（7月16日／火）は、各選手の基本的な能力・技術を確認・チェックする「測定」を実施。一塁から二塁への盗塁、二塁から本塁への生還を想定した「走り測定」が行われ、各選手の基本的な足の速さ、走力・脚力がチェックされた。

続いて、各選手の「第1希望」のポジションでシートノック、個々の基本的なクラブさばき、捕球の確実性、送球の正確性・肩の強さ、打球への反応、敏捷性、守備範囲の広さ等、守備の基本技術・守備能力が問われる選考が行われた。また、「第2希望」のポジションでは複数ポジションをこなせるユーティリティー性も選考の対象とされた。

併せて、捕手の盗塁阻止を想定した二塁への送球のタイム計測も行われ、捕球から送球に移る動作の素早さ、

肩の強さ、スローイングの正確性が確認・チェックされた。

さらには、ピッチャーは自らの有する球種を申告し、1球種ごと3球、スピードガンによる球速測定も実施された。

最後に打撃面の基本技術がフリーバットイングでチェックされ、基本的な打撃フォーム、スイングスピードの速さ、ミートの正確性、打球速度、飛距離等が一人ひとり確認され、初日の選考を終えた。

選考会2日目（7月17日／水）、最終日（7月18日／木）は「実戦形式」での選考となり、選考会参加者をA・B・Cの3グループに振り分け、実際の試合を想定した選考が実施された。



令和6年度
女子大学
日本代表
選手選考会
詳報はこちら

「女子大学アジアカップ」は第1回大会が2016年に創設され、台湾・台中で開催されており、その際には、「日本代表」というよりは関西の大学を中心とした編成で臨んでいる。

大会には、日本、インド、韓国、マレーシア、チャイニーズ・タイペイの5チームが参加し、日本は予選リーグを2勝2敗の3位。上位4チームによる決勝トーナメントでは、初戦で予選リーグ4位のマレーシアに7-0で勝利したものの、決勝進出をかけた「3位決定戦」で優勝したチャイニーズ・タイペイに0-2の完封負けを喫し、3位に終わっている。

2018年に中国・南京で開催された第2回大会には、チャイニーズ・タイペイ、インド、中国、シンガポール、日本、マレーシア、香港、イラクの8チームが参加。参加8チームを2つのグループに振り分け、日本はマレーシア、香港、イラクと同組の「プールB」を3戦全勝の1位で通過し、両グループ上位2チームによる決勝トーナメントに進出。初戦、「プールA」1位のチャイニーズ・タイペイに5-6で惜敗して敗者復活戦に回り、2位同士の対戦を勝ち上がってきた中国に1-2で敗れ、またしても3位に終わった。

2020年に第3回大会の開催が予定されていたが、コロナ禍で2022年まで延期され、タイ・パタヤで開催。この大会から大会名称が「女子大学アジアカップ」に改称され、チャイニーズ・タイペイ、マレーシア、香港、タイ、日本、シンガポール、インド、韓国の8チームが参加。試合方式もWBS C(世界野球ソフトボール連盟)方式が採用され、参加8チームを4チームずつA・B2つのグループに分け、まずグループ内で予選リーグにあたる「オープンングラウンド」をシングルラウンドロビン(1回総当たり)のリーグ戦で実施。

その順位に基づき、両グループの上位3チームが「スーパラウンド」に進出。すでに同じグループで対戦したチームとは対戦せず、その試合結果を持ち越し、異なるグループの1位、3位のチームと対戦し、順位を決定。「スーパラウンド」3位・4位のチームが「3位決定戦」を、同1位・2位のチームが「優勝決定戦」を行い、最終順位を決定する試合方式に改められた。

日本はシンガポール、インド、韓国と同組の「グループB」に振り分けられ、「オープンングラウンド」ではシンガポールを11-0の4回コールド、インドを15-0の3回コールド、韓国を7-0の5回コールドと3試合連続のコールド勝ち。3戦全勝の1位で「スーパラウンド」

に進出すると、「グループA2位」のタイに10-0の4回コールド勝ち。続く「グループA1位」のチャイニーズ・タイペイとの「全勝対決」に5-0の完封で勝利を収め、最終戦の「グループA3位」香港との対戦は15-0の3回コールド勝ち。「オープンングラウンド」「スーパラウンド」通じて6戦全勝、6試合中5試合がコールド勝ちという圧倒的な強さで「優勝決定戦」に駒を進めた。

しかし……「優勝決定戦」では「スーパラウンド」2位のチャイニーズ・タイペイを相手に大苦戦。延長タイブレークにもつれ込む熱戦の末、8回裏、無死満塁から現在、「J.D. リーグ」日立サンデューバで活躍中の女鹿田千紘が左中間へ劇的なサヨナラ安打を打ち、5-4でチャイニーズ・タイペイを振り切り、初の優勝を手に入れている。

また、この大学のカテゴリのみ、「ワールドカップ」が実施されておらず、過去には2004年にアメリカ・プラントシテイで現在の「ワールドカップ」にあたる「第1回世界女子選手権大会」が開催され、8チームが参加。アメリカが優勝を飾り、日本は3位。その2年後に台湾・台南で「第2回大会」が開催され、6チームが参加。アメリカが「連覇」を達成し、日

本は2大会連続の3位となっている。2007年にはタイ・バンコクで開催された「第24回ユニバーシアード」の総合大会の中の正式種目として実施され、10チームが参加。日本は銅メダルを獲得している。

その後は2010年、イタリヤ・マチェラータで第3回大会が予定されていたが参加チーム不足で中止。

2012年にも「大会復活」の機運が高まり、アメリカ・コロラドスプリングスでの大会開催が呼びかけられたが参加国が集まらず、再び中止。その後は世界規模の大会が開催されないまま、今日に至っている。

ぜひこの大学のカテゴリでも「ワールドカップ」を復活させ、大学生の新たな「目標」となるような大会を開催してもらいたいところだ。

今回の選考会の対象となる「第4回女子大学アジアカップ」は、10月15日(火)〜19日(土)、台湾・台中で開催が予定されている。

また、大会出発直前の10月9日(水)〜11日(金)の3日間、今回のチームを率いる佐藤理恵ヘッドコーチが監督を務める東京女子体育大学で「直前合宿」を行い、そのまま大会の開催地である台湾・台中へと出発する。



单独
首位

MORI ALL WAVE KANOYA

Sapphire Section

第 57 回
日本女子ソフトボールリーグ
交流節



3チームが同率に並ぶ大混戦

Platinum Section

平林金属 Peachblossoms

VONDS 市原

厚木 SC

【交流節】 令和6年7月5日（金）～7日（日）

富山県富山市・岩瀬スポーツ公園ソフトボール広場
※プラチナセクション・サファイアセクション合同開催

☆プラチナセクション☆
VONDS 市原
平林金属 Peachblossoms
厚木 SC 3チーム同率首位

★サファイアセクション★
MORI ALL WAVE KANOYA
順位逆転！ 单独首位に躍進！！

●交流節・プラチナセクション概要●

「第57回日本女子ソフトボールリーグ」交流節は、7月5日(金)～7日(日)の3日間、富山県富山市・岩瀬スポーツ公園ソフトボール広場を会場に開催された。

この「交流節」では、前半戦第2節までの順位に基づき、「プラチナセクション」1位・3位・5位のチームは「サファイアセクション」2位・4位・6位のチームと、2位・4位・6位のチームは1位・3位・5位のチームと対戦。各チーム3試合を行った。

第2節終了時点で4勝1敗のVONDS市原は、平林金属と「同率」で並ぶ形となっていたが、「直接対決」の勝敗により、勝者・VONDS市原が1位、敗者・平林金属が2位となった。

3位・4位も同様に、3勝2敗でYKKと厚木SSCが並んだが「直接対決」の結果で勝者・YKKが3位、敗者・厚木SSCが4位となり、1勝4敗の静甲が5位、勝ち星なしで5連敗のペヤングが6位でこの「交流節」に臨んだ。

VONDS市原は初戦、「サファイアセクション」2位・MORIALL WAVE KANOYAと対戦。序盤3点をリードしながら追いつかれ、サヨナラ負けで2敗目を喫した。その後は2試合に連勝し、通算成績6勝2敗となった。

2位・平林金属も今節2勝1敗でVONDS市原と「同率」の6勝2敗となり、両チーム譲らず「首位並走」の状態が続いている。

そこに割って入ったのが厚木SSC。この「交流節」で見事な3連勝！通算成績6勝2敗と星を伸ばし、首位を並走するVONDS市原、平林金属に並びかけ、3チームが首位に並ぶ「大混戦」の状況となった。



交流節3連勝で一気に「同率首位」に並んだ厚木SSC

「ホーム」開催のYKKは1勝2敗と星を伸ばせず、通算成績4勝4敗の4位。今節2勝1敗と勝ち越した静甲が3勝5敗の5位。ペヤングは今節も残念ながら3連敗。開幕から勝ち星なしの8連敗となってしまった。

●交流節・サファイアセクション概要●

「第57回日本女子ソフトボールリーグ」交流節は、7月5日(金)～7日(日)の3日間、富山県富山市・岩瀬スポーツ公園ソフトボール広場を会場に開催された。

この「交流節」では、前半戦第2節までの順位に基づき、「サファイアセクション」1位・3位・5位のチームは「プラチナセクション」2位・4位・6位のチームと、2位・4位・6位のチームは1位・3位・5位のチームと対戦。各チーム3試合を行った。



MORIALL WAVE KANOYA が単独首位に！

第2節を終え、通算成績4勝1敗で単独首位に立っていた大和電機工業は、

この「交流節」1勝2敗と星を伸ばせず、通算成績5勝3敗となり、2位に転落。

第2節終了時点で3勝2敗で並び、得失点差で2位となり、この「交流節」に臨んだMORIALL WAVE KANOYAが今節3連勝！大和電機工業を抜き去り、「単独首位」に立った。

同じく第2節終了時点で3勝2敗ながら得失点差の争いで3位となったCitric Ichinomiya、4位に甘んじた小泉病院はいずれも1勝2敗と星を伸ばせず、4勝4敗の勝率5割。上位争いから一歩後退した。

2勝3敗の5位でこの「交流節」を迎えた花王コスメ小田原は、今節2勝1敗で乗り切り、通算成績4勝4敗。勝率5割に戻し、「同率3位」に並んだ。

上位チームが激しい星の潰し合いを繰り返している中、ルネス紅葉スポーツ柔整専門学校は「蚊帳の外」に置かれたような状態で、この「交流節」も3連敗。開幕から勝ち星なしの8連敗で大きく水を空けられている。YKK戦では最終回に満塁本塁打を含む2本の本塁打を放ち、一挙8点を奪う猛攻を見せるシーンもあったのだが…勝利が遠く、出口の見えない「連敗」のトンネルの中で喘いでいる。

第57回日本女子ソフトボールリーグ 交流節					
月 日	セクション順位	試合結果		セクション順位	
7月5日(金)	プラチナ1位	VONDS市原	3-4	MORI ALL WAVE KANOYA	サファイア2位
	プラチナ4位	厚木SC	1-0	花王コスメ小田原 フェニックス	サファイア5位
	プラチナ3位	YKK	11-8	ルネス紅葉スポーツ柔整専門学校	サファイア6位
	プラチナ1位	VONDS市原	5-1	小泉病院 Blue Arrows	サファイア4位
	プラチナ6位	ペヤング	0-4	大和電機工業	サファイア1位
	プラチナ2位	平林金属 Peachblossoms	7-1	Citrine Ichinomiya	サファイア3位
	プラチナ3位	YKK	6-9	小泉病院 Blue Arrows	サファイア4位
	プラチナ5位	静甲	2-0	ルネス紅葉スポーツ柔整専門学校	サファイア6位
	プラチナ2位	平林金属 Peachblossoms	1-2	花王コスメ小田原 フェニックス	サファイア5位
7月6日(土)	サファイア1位	大和電機工業	0-4	厚木SC	プラチナ4位
	サファイア6位	ルネス紅葉スポーツ柔整専門学校	1-10	VONDS市原	プラチナ1位
	サファイア5位	花王コスメ小田原 フェニックス	3-1	ペヤング	プラチナ6位
	サファイア3位	Citrine Ichinomiya	0-4	厚木SC	プラチナ4位
	サファイア1位	大和電機工業	1-4	平林金属 Peachblossoms	プラチナ2位
	サファイア2位	MORI ALL WAVE KANOYA	8-3	静甲	プラチナ5位
	サファイア3位	Citrine Ichinomiya	6-5	ペヤング	プラチナ6位
	サファイア2位	MORI ALL WAVE KANOYA	2-0	YKK	プラチナ3位
	サファイア4位	小泉病院 Blue Arrows	0-4	静甲	プラチナ5位

※試合のスコアをクリックすると各試合のレポートがご覧になれます

東海地区大学選抜チーム vs JSL Jr オールスターチーム

● 2 - 3 ○

Special Event



レジェンドチーム vs JSL オールスターチーム

● 1 - 4 ○ ※3イニング

JSL オールスターゲーム
プラチナオールスター vs サファイアオールスター

○ 3 - 1 ● ※6イニング

7月7日(日) 開催

第57回日本女子ソフトボールリーグ

プラチナセクション 交流節終了時点 順位表

順位	チーム名	勝敗	勝率
1位	VONDS市原	6勝2敗	0.750
1位	平林金属 Peachblossoms	6勝2敗	0.750
1位	厚木SC	6勝2敗	0.750
4位	YKK	4勝4敗	0.500
5位	静 甲	3勝5敗	0.375
6位	ペヤング	0勝8敗	0.000

サファイアセクション 交流節終了時点 順位表

順位	チーム名	勝敗	勝率
1位	MORI ALL WAVE KANOYA	6勝2敗	0.750
2位	大和電機工業	5勝3敗	0.625
3位	小泉病院 Blue Arrows	4勝4敗	0.500
3位	Citrine Ichinomiya	4勝4敗	0.500
3位	花王コスメ小田原 フェニックス	4勝4敗	0.500
6位	ルネス紅葉スポーツ柔整専門学校	0勝8敗	0.000



大会結果詳細、戦績表、チーム紹介・選手プロフィール、試合スケジュール等詳細は
JSL オフィシャルウェブサイト <https://jssl-women.com/>

事務局だより

「凱旋帰国」 女子TOP日本代表

7月15日（月・祝）～20日（土）、イタリア・カステイオンズ・デイス・トラーダで開催された「第17回女子ワールドカップファイナルステージ」で、「宿敵・アメリカ」の大会3連覇を阻止し、2014年以来、3大会ぶり4回目の「優勝」「世界一」に輝いた女子TOP日本代表が、7月24日（水）、「凱旋帰国」を果たした。

この「凱旋帰国」に際しては、（公財）日本ソフトボール協会・牧島かれん会長が祝福に駆けつけた他、チーム関係者、多くのメディア、報道関係者が詰めかけ、華やかな「祝福ムード」いっぱいでの帰国となった。

帰国後、すぐに記者会見も行われ、今回の「第17回女子ワールドカップファイナルステージ」優勝の喜びを噛みしめながらも、ソフトボールがオリンピック競技「復活」「復活」を果たす2028年ロサンゼルスオリンピックでの「3大会連続金メダル獲得」へ決意を新たにし、まだこの「優勝」は「通過点」であり、「LA28」へ向かう「金メダルロ

ード」のスタート、「第一歩」に過ぎないことを選手一人ひとりが心に刻み込み、チーム全員が「向かうべき目標」「真の到達点」を再確認していた。



「第17回女子ワールドカップ ファイナルステージ」優勝の祝福に駆けつけた（公財）日本ソフトボール協会・牧島かれん会長（最前列左から3人目）、JD・リーグ・富永哲夫チェアマン（最前列左端）と一緒に記念写真に収まった